特集

ねこ 猫 ネコ

犬と猫。わたしたちにとって身近な動物の二大スターのうち、干支になったのは犬だけだ。しかし今年は猫派の方のご要望にもお応えし、干支シリーズの番外として猫をとり上げる。一二年前の本誌犬特集と並べ、犬派の方にも猫派の方にも楽しい新年をお迎えいただきたい。

【写真上から】
張り子人形 猫達磨（日本、H001424 4）
影絵人形芝居用人形 山猫（インドネシア、H0067796）
切り絵 黒猫（中国、H0170454）

ネコ歩きで世界を横切れば

吉岡 乾　民博 人類基礎理論研究部

「飼い犬は自分のことを人だと思っている。飼い猫は人のことを大きな猫だと思っている」

どこからとなく聞こえて来た言説であるが、つい膝を打ってしまう直観ではないか。

世にも可愛い猫たちは、いつだって適度な距離を保ちつつ、人の生活の端々に姿を見せている。地点も時点も問わずにだ。だからこそ、犬ほど一貫していない、さまざまなイメージでとらえられてきているのだろう。

吉祥か凶兆か

例えば「猫たちがいないと鼠どもがのさばる（Quo non versantur cati, mures dominantur：ラテン語）」と諺がいい、一九九六年の民営化まで英国鉄道がケーブル警備にと二〇〇匹の猫を雇っていたように、人を守るものとしての猫の存在がある。養蚕地では、丹後峰山の金刀比羅神社に狛猫がいるように、家々を守ってくれる猫がありがたい。彦根のゆるキャラ「ひこにゃん」のモデルとなった猫が雨中の井伊直孝を招き入れた世田谷の豪徳寺をはじめ、日本各地の寺社が起源を相唱える招き猫だって、客や財、延いては福を呼び込んで人を助ける。和歌山電鐵貴志川線のウルトラ駅長「たま」は、廃線に直面した当路線を救い、今でも貴志駅のたま神社で「たま大明神」として、「ニタマ（たま＝世）」スーパー駅長や伊太祈曽駅の「よんたま」駅長見習いとともに、人を呼び続けている。猫による加護は、はるかむかしのエジプトでも折り紙付きだ。

一方で、日本では黒猫が行く手を横切ったら凶兆とされ、遠くパキスタンでも「猫が横切る（billi ulághnā：ウルドゥー語）」のは旅の不幸を告げるジンクスになる。由緒正しいセルビアの吸血鬼は、墓を猫などの不浄な生物が跨ぐことで、その死体が化けて出ると伝えるし、同じくスラヴ語圏で「彼らのあいだに黒猫がいる（medu njima crna mačka：ツルナゴーラ「モンテネグロ」語）」といえば、不仲を意味する。夜世界と昵懇な黒猫はキリスト教圏の魔女のお供、恰好のイメージシンボルとして定着しているし、ポーランドの黒猫は八年で悪魔になったりもした。

ちょうどの距離感

そのように好まれ嫌われる猫を観察することで得られる知見もある。眼前で「猫を好奇心が殺した（curiosity killed the cat：英語）」のを教訓に、藪をつつくのをやめようと思うかも知れない。かつてある港では、猫が踊り、夕刻に崖から身投げして行くのを見た住民が、異常事態を確信した。猫たちを捕まえ、実験をし、そうして病理の究明が進んだ。猫踊り病、後世にいう水俣病は、猫が踊らなかったらもっと被害が甚大になっていたかも知れない。量子力学のコペンハーゲン解釈では、箱のなかを観察しない限りシュレーディンガーの猫の生死は永遠に闇のなかである。だが、パンドラの箱を開けなければ、問題解決の希望すら得られない。九つも命をもつという猫は、ときに、死することで人を救ってきているのだ。自分は日月を切り落とし、天地を粉齏して不可思議の太平に入りつつ、序でに誰かを救ってくれちゃうのだから何とも抜け目なくて、「らしい」ではないか。

世界各地で男性の欲を満たしている薄暗い猫の家（cat house【＝売春宿・遊廓】）は時代が下って数を減らした。近年の日本では、日夜明々とした猫カフェや、長閑な猫島といった空間が、癒しを求める老若男女に人気を博している。発情期に裏庭で嬌声を上げては冷や水で追い払われる猫も、次第に、庭とともに住宅街から消えていった。野良猫は都会から離れ、飼い猫もロクロク散歩に外出できない時代になりつつある。人間本位の生活にやや強引にとり込まれ、自由と反抗の象徴であった猫から、肝腎な自由が奪われつつある。

これ以上、猫の反感を買ってはならない。手を引っ掻かれて顔が腫れ上がったことのある一介の猫好きとして進言したい。ブラジルの蝶が羽搏いてテキサスが竜巻に見舞われるように、松明を結われた「猫の尻尾で街が焼き尽くされるような（buse isúmalce sáhar ghulúm juán：ブルシャスキー語）」出来事は、いつどこで起こるかもわからない。各地では、野良化した捨て猫が「外来種」として生態系に爪を立てだした。

高遠なネコの世界

多世界解釈のシュレーディンガーの猫は、命を賭して、見られるたびに世界を倍々に増やす。だけど、どの世界でも猫はきっと、犬のように他者のためには遊ばず、愛らしく、気儘で、自分だけのために遊ぶのだ。そうあるべきなのだから、そうあらせよ。人は猫を道具にはできない。対等で上々なのだから、高望みをやめよう。K・チャペックが猫から高尚な人生の閃きを貰ったように、E・T・A・ホフマンや夏目漱石が銘々に見識高い猫の語りを代筆させて貰ったように、人は猫から迂遠な恩恵に与るくらいがちょうど良い。そんな猫と人とのつきあいを見つつ古今東西を横切れば、それもまたひとつの寄せ絵になろう。

峰山にある金刀比羅神社（「こんぴらさん」）の狛猫。丹後ちりめん発祥のこの地で、猫は守り神だ（2017年）

豪徳寺には、福を招いた実績をもつ「招福猫児（まねぎねこ）」が奉納されている（2017年）

「ねこ」の語源は諸説ある。よく寝ているから「寝子」というのも、「ねー」と鳴くから「ねこ」（「わんこ」「べこ」に同じ）というのもある（2008年）

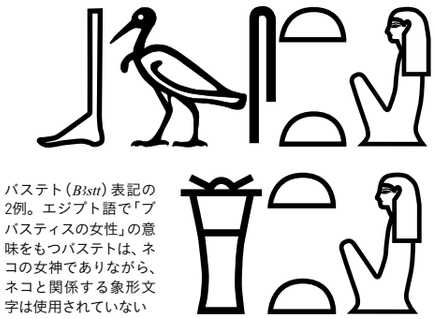
エジプトのネコの女神「バステト」

肥後 時尚
関西大学大学院博士課程
関西大学国際文化財・文化研究センター
リサーチ・アシスタント

カイロの裏通りを歩くと、路上や石垣を気ままに歩くネコに遭遇する。現代のエジプト人の生活に溶け込むネコは、古代のエジプトでも身近な動物であったと同時に神聖な動物として崇められた。

ネコの女神バステトは、古代エジプト人が抱いたネコに対するイメージを知る手がかりとなる。バステトは通常、ネコの姿、あるいはネコの頭をもつ人間の姿であらわされ、ブバスティス（カイロの北東約八〇キロメートル、現在のテル・バスタ）を中心にエジプトのさまざまな場所で崇拝された。バステトは、初期王朝時代（前三一世紀～前二七世紀）から登場し、王や死者を保護する役割を担った。しかし、時代の経過とともに人気を博し、その姿や役割を変化させてゆく。

カイロの裏通りを歩くネコ（2017年）



バステト（*Bꜣstt*）表記の2例。エジプト語で「ブバスティスの女性」の意味をもつバステトは、ネコの女神でありながら、ネコと関係する象形文字は使用されていない

もともとはライオンの女神？

バステトといえば、ネコの姿を思い浮かべることが多いだろう。しかし、初期の資料には、雌ライオンの姿の女神にバステトの名前がしるされている。もともとバステトは、ライオンの獰猛さと母親の優しさをもち併せた女神であった。しかしその後、セクメトやマヘスといったライオンの姿をもつ他の神々に凶暴な性格を譲ったのか、中王国時代（前二二世紀～前一八世紀）にはネコの姿でもあらわれるようになり、穏やかな女神の一面が強調されることとなった。

ネコとしてあらわれたバステトの性格は、しばしば雌ライオンの女神セクメトと対比される。セクメトが凶暴性や戦争、病疫を司る荒々しい女神であるのに対して、バステトは穏やかさや保護、女性の多産性を象徴する女神であった。これは、エジプト人がネコとライオンに抱くイメージをそのまま女神の性格に反映したものであろう。時代は下るが、プトレマイオス朝時代（前四世紀～後一世紀）の「アンクシェションクィの教訓」には次のような興味深い一節がしるされている。「男が没薬を嗅ぐとき、その妻は彼に対してネコとなり、嘆くときには雌ライオンとなる」。古代エジプト人の女性に対するイメージは、現代にも通じるような優しさと厳しさを兼ね合わせたものだったのかもしれない。

バステト女神像（ニュー・カールスバーグ美術館、末森薫撮影、2017年）

空前の「ネコブーム」から現代へ

エジプトの神々のなかでも古株のバステト女神であるが、エジプト第二二王朝時代（前一〇世紀～前八世紀）になり、最大の転機を迎える。王朝の首都がバステト信仰の中心地、ブバスティスへと移ったのである。これにより、バステトは王公認の神としての地位を確立し、絶大な人気を博すこととなった。まさしく空前のネコブームである。そして、その後もバステトは、古代エジプトの宗教が終焉を迎えるまでの一〇〇〇年以上にわたって、妊婦や幼児を保護する身近な慈愛の女神として人びとの生活に溶け込み、愛され続けたのである。

現代のエジプト人がもつネコへの親近感は、ひょっとすると古代の愛情の名残なのかもしれない。

猫をかぶった人形たち

井上 章一
国際日本文化研究センター教授

嫌われた招き猫

招き猫は、今日ちょっとしたファンシー・グッズのひとつになっている。コレクションをしているという人も、いなくはない。

手招きをする猫の人形が世にあらわれたのは、一九世紀のなかごろであった。『武江年表』（第九巻）が、一八五二（嘉永五）年の記録に、そのことを書きとめている。浅草三社権現脇で、「泥塑の猫」が売られ人気を集めていた、と。ただし、「心ある人は用いず」とも、のべそえている。

玩具研究で知られる有坂與太郎は、『郷土玩具大成第一巻東京編』で、こう書いた。「招猫を迎える階級は主として娼家に限られている」、と。一九三五（昭和一〇）年の指摘である。

井伏鱒二は『駅前旅館』（一九五七年）の主人公に、こう語らせた。「ちかごろ、たいていの飲屋で招き猫を置いてるね。やっぱしこれも流行かね」、と。この質問に店の女将は、こたえている。街の顔役におし付けられ、「嫌で嫌でたまらないけれど飾っている」のだ、と。

土人形（H0013847）

縁起棚の人形

招き猫は、一九世紀中葉に、芸娼妓とかかわる店へおかれだした。嫖客を招く縁起物として、縁起棚へかざられることから、はじまっている。そのため、一般社会からは、いやらしい物として、ながらく敬遠されてきた。しかし、二〇世紀のなかごろには、渡世人らの手も介して、花街の外へ広まりだす。例えば、酒場などに。それは、売買春の場から世間へ広がった置き物に、ほかならない。

張り子人形（H0014427）

一九世紀までの遊里では、縁起棚へ男根の模造品をおいていた。生殖器崇拝の典型というべきか。遊女たちは、男の一物を象った造形物に、手をあわせていたのである。いい客が来ますように、と。

西洋との交際がはじまってからは、その取締りがきびしくなる。幕府も明治新政府も、本格的な摘発にのりだした。招き猫には、その代替品として、同じ縁起棚へおかれていったという一面がある。

男根から猫への移行期に作られたとおぼしき遺物も、なくはない。招き猫を手にもち、上へ引っぱりあげると、下から男根模型が出てくる。そんな細工物も、見たことがある。

これなどは、文字どおり「猫をかぶった」ケースの、その代表例であろう。

「猫をかぶる」という慣用句の語源も、そこにある。生殖器崇拝の内実を、猫の外被で糊塗した歴史に根ざしていると、わたしは考える。コレクターにつげるべきかどうかは、判断がむずかしいのだが。

国芳と猫

津田卓子　名古屋市博物館学芸員

猫はかわいい。その気持ちは江戸時代の人も同じだったようだ。

とりわけ猫好きとして知られ、浮世絵の作品が多く残っているのが江戸時代後期の浮世絵師歌川国芳である。弟子が描いた厳めしい肖像からは想像しにくいが（図1）、つねに五、六匹の猫を飼っていて、懐に入れた猫に物語を聞かせながら絵を描いていただの、愛猫の死にあたり、戒名を付け位牌を飾っただの愛猫家らしいエピソードが伝わっている（図2、猫を抱える国芳自画像）。さすが暮らしをともにしていただけあって国芳は良く観察しており、ちょっとしたしぐさや表情など生き生きとした猫の姿を写しとっている。

図1　落合芳幾「国芳死絵」【図はいずれも名古屋市博物館（高木繁コレクション）蔵、杉浦秀昭撮影、2004年】

江戸時代の猫ブーム

その国芳が描いた猫の浮世絵が天保一二～一三（一八四一～四二）年ごろ、ブームとなった。このとき描かれたのは、当時評判をとっていた見世物興業（鞠の曲芸）を擬人化した猫で描いたものや、歌舞伎役者の似顔絵を「猫顔」で描いた役者絵などである。また、おこまという猫の波瀾万丈人生（猫生?）をテーマとした小説の挿絵も描いており、そこでも役者の似顔絵猫が登場する。擬人化猫ならぬ、擬猫化役者絵とでもよびたいものだ。例えば少し時代が下る作例だが、「流行 猫の戯　おしゆん伝兵衛　身の臭姪色時」（図3、弘化四［一八四七］年ごろ）では、お俊を演じる四代目尾上梅幸と白藤を演じる四代目中村歌右衛門の似顔絵を国芳は猫顔で描いている。

図2
歌川国芳「浮世よしづくし」部分

最近ではスマートフォンで自分の顔を、猫などの動物に変換できるアプリがあるが、それを歌舞伎役者（有名人）でおこなったというわけ。ちょっと想像してみてほしい。あなたの好きなアイドルや俳優の顔が猫顔になったら……と。話題になるのも当然ではないだろうか。

猫絵のニーズ

さて、この天保期が契機となって擬人化猫絵、擬猫化役者絵は、明治に入ってからも描きつがれていく。一過性のブームで終わらず定番画題となっていくのである。

ここで浮世絵があくまでも「商品」であることに目を向けたい。版元（出版者）としては、売れるものを作るはずである。商売に厳しい彼らが、ニーズを見込んだからこそ制作され続けたといえる。つまり、単に国芳ら浮世絵の作者たちが、個人的に猫好きだったからだけで出版されたものではないだろう。

それだけニーズがあった、つまり猫が江戸時代の人びとに親しまれ愛されていたからにほかならない。

国芳の浮世絵からは、今もむかしも変わらぬ「猫愛」が見えてくるのである。

図3　歌川国芳「流行 猫の戯 おしゆん伝兵衛 身の臭姪色時」

野生からペットへ
――ネコと人の共存を求めて

池谷和信　民博 人類文明誌研究部

狩猟で捕獲された野生ネコ（1987年）

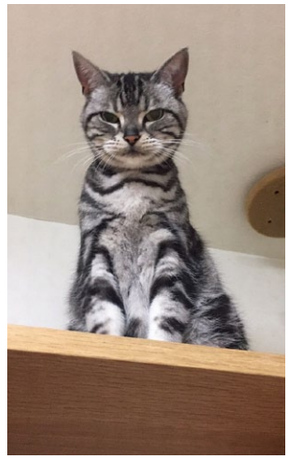
キャットハンター

今から三〇年前、わたしはアフリカ南部のカラハリ砂漠の大地を歩いていた。弟子入りしていた現地に暮らすサン（ブッシュマン）のハンターと数匹の犬と一緒である。カラハリ砂漠は見渡す限り地平線からなる平坦地であり、大海原のなかにいるような錯覚を起こす場所だ。わたしは、ハンターのすぐ後ろでかなり前方を歩く犬の動きを注視していた。すると、一匹の犬が走り出した。何かの獲物を追っているようだ。それは、犬に追い詰められて樹高一〇メートル余りある木の上に登った。野生ネコだ。ハンターは木の棒を投げてネコを木から落としてから、犬がネコにくらいついているあいだに棒で仕留めた。捕獲したネコは村まで運ばれてから解体された。肉は自家消費されて、毛皮はバッグの素材として使われていた。

その後、わたしは世界中の狩猟採集に従事する村をまわってきたが、飼い犬は多く見られても、飼いネコはアマゾンの村などを除いては見たことがない。それは、ものの本にあるようにネコの家畜化は農耕と関係するということを示しているのであろう。ネコは、数千年前に西アジアにて貯蓄した農作物を食べにくるネズミを退治するために家畜化されたという。近年の研究では、野生と家畜ネコの遺伝子がほとんど変わっていないことからネコの方から家畜になるのを選んだともいわれる。また、西アジアからアフリカにかけて野生ネコは四亜種が広く分布するが、このうちアフリカを中心に生息するリビアヤマネコが家畜化されたのだという。カラハリ砂漠の村の場合は、野生ネコは生息しているが、現地で農耕は盛んでないので家畜ネコにする必要がなかったのであろう。

野生の残るペットネコ

現在、世界的に見るとネコはわたしたち人類にとってペットとして欠かせない時代に入っている。日本でも、一五歳以下の子どもの数より犬とネコを加えた頭数の方が多いといわれるが、大都市では犬よりネコの飼育数が多くなっている。亡くなったネコのお墓などからも、家族の一員としてのネコの位置が見えてくるだろう。一方で、ノラネコをめぐっては国内の各地で評価がわかれている。宮城県石巻市田代島のようにノラネコと観光を結び付けている地域もあるが、鹿児島県奄美大島ではノラネコがアマミノクロウサギを捕食するというので駆除が検討されている。ここでは、放し飼いのネコが野生化してノラネコになっているので室内での飼育を求める人もいる。



高いところが好きで、ジャンプが得意。ペットネコにも野生が残る（2017年）

このように、現代社会は、野生ネコ、家畜ネコ、ペットネコが多様に共存する時代である。これらの三つのネコと人とのかかわりの歴史に思いを寄せてみると、ネコは人をどのように見ているのだろうかと考えてしまう。我が家でも二匹のネコ（サクラとユズ）を飼っているが、なついているのは餌を与えている妻のみである。ベランダにセミが入ってくると追いかけまわすネコ。ネコは家畜化をへて数千年を経過したものの、野生性を失っていない。ネコの生き方を見習いたいものだと思っている。

黒猫と魔女

小林繁子（こばやししげこ）　新潟大学准教授

悪魔の化身としての猫

足音を立てない密やかな歩行、暗闇で光る眼。猫、とりわけ闇に紛れる黒猫は神秘的・魔術的な存在とみなされてきた。ヨーロッパで魔女の存在が確信されていた時代には、魔女はもちろんのことその相棒たる猫も「迫害」を受けることがあった。特定の祝日に猫を入れた袋を火に投げ込む、火をつけた猫を追いかけ回すなど、今日の愛猫家が卒倒しそうな猫虐待の慣習がヨーロッパ各地にあったのである。

中世以来、悪魔はときに猫の姿であらわれると信じられた。一五世紀の美しい彩色写本挿絵には、「異端者（ワルドー派）の集会」としてしっぽを立てた猫の尻に向かって人びとが礼拝する様子が描かれている。忠実で誠実な犬が神や教会に背く異端者に向かって吠えかかるのに対し、猫は狡猾（こうかつ）な悪魔の眷属（けんぞく）、または悪魔そのものとされたのだった。魔女も夜中に秘密の集会をおこなうと信じられたが、ここでも猫は魔女たちを魔女集会（サバト）に運び、妖術をおこなうときに付き添うという役目を負っている。魔女集会を描いたエッチング（一六二五年）を見ると、フクロウや蛇と並んで、梢（こずえ）の上や木の根元にあまり愛らしくない猫の姿がひっそりと描かれている。「側に常々仕えるは／気味の悪い動物ども／ネコ、ヘビ、カエルにフクロウたちが／おぞましい叫びをあげる」のだという。

上：悪魔の化身として崇拝される猫（1469年）
（出典：黒川正剛『図説　魔女狩り』河出書房新社、2011年、23頁）
下：魔女集会に参加する猫の目が不気味に光る
（出典：Wolfgang Harms *Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts*, Bd. 1, S. 315.）

性のシンボル

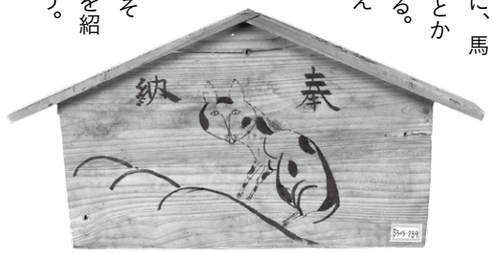
魔女と猫のもうひとつの共通点は、性的なイメージだろう。魔女は悪魔と性的に交わり、キリスト教の性道徳も踏みにじると考えられた。魔女集会はそうした狂乱の性の宴でもあったのだ。発情期の猫が夜半に上げる唸（うな）り声は、恐るべき性欲の象徴であった。一六世紀のドイツの画家バルドゥンク・グリーンは蠱惑（こわく）的な肉体をもつ魔女の絵画を多く残しているが、外見的な美しさは内面の背徳性を映し出しているのだ。一六世紀に出版されたビラに、こんなエピソードがある。おしゃれに夢中になったアントウェルペンの商人の娘が貴族のように気飾って鏡に向かっていると、悪魔が彼女の首をひねり上げ、彼女は死んでしまう。後日彼女の遺体の入った棺を運ぼうとするが、不自然に重い。蓋を開けてみると彼女の遺体はなく、猫が鏡とともに飛びだしていき、悪臭だけが残されたという。外見の美に捕らわれた娘の魂が悪魔のものとなったという含意なのだろう。これは猫と女性の外見的美しさ、その背徳性が結びつけられた例である。黒猫と魔女のコンビは現代ではアニメ作品などを通じてすっかりおなじみだが、そのはるか遠景にはこうしたネガティブなイメージがあったのだ。

右：バルドゥンク・グリーンの描く妖艶な魔女（1523年）
（出典：黒川正剛『図説　魔女狩り』河出書房新社、2011年、77頁）
上：娘の遺体は猫に姿を変えた（1583年の木版画）
（出典：Wolfgang Harms *Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts*, Bd. 7, S. 287.）

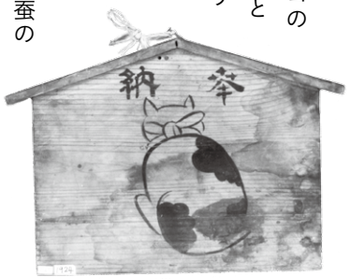
戌年で絵馬でネコ

内田吉哉（うちだよしや）　民博 機関研究員

国立民族学博物館が所蔵する標本資料のなかに、ネコが描かれた日本の絵馬がある。絵馬とは本来、神仏に願いをかけるうえで本物の馬を奉納する代わりに、馬を描いた絵を用いたことから始まったものとされる。また戌年の正月を迎えたこの時期、神社で干支である犬を描いた絵馬を見かける機会も多いことだろう。だが、絵馬なのに馬でも干支でもなくネコ。その理由を、当館の資料を紹介しながら探ってみよう。



岩手の絵馬。裏には願主の名前と明治39年の年記
（H0020332）



宮城の絵馬は後ろ姿。裏には大正13年の年記
（H0157139）

働くネコ

ことわざに「ネコの手も借りたい」などといわれてしまうように、一般にネコはあまり何かの役に立つ動物だとは考えられていない。しかし、かつて日本で養蚕の盛んな地域では、蚕をネズミの被害から守るためにネコが飼われ、ネコも立派に働いていたのである。こちらに掲載した、岩手県と宮城県の絵馬をご覧いただきたい。岩手県の絵馬は、願主が自分で描いたらしい味のあるネコの絵である。宮城県の絵馬では、首輪代わりにヒモを結んでもらったネコの後ろ姿が描かれる。

両者ともに養蚕が盛んであった地域のもので、ネコは生活に欠かせない存在であった。しかし、なかにはネズミをとるために必要なネコがうまく育たない養蚕農家もあり、そのような場合に、自家のネコが無事に生育するように願をかけて絵馬を奉納したとされる。

捧げられるネコ

一方で、なぜ絵馬にネコが描かれたのか、理由が不明なものもある。例えば、魚を見つめるネコを描いた青森県の絵馬がある。青森県では、津軽地方にネコの絵馬がよく見られるという。青森や秋田では、ゴミソ（カミサマ）とよばれる民間巫者（ふしゃ）に卜占（ぼくせん）を頼み、お祓（はら）いのために絵馬を奉納する風習がある。その際に、絵馬にネコの絵が描かれることが多いというのだが、その理由は判然としない。

青森の絵馬。板を釘で打付けた素朴なもの
（H0015691）

家族としてのネコ

もちろん、現在と同じくペットとして家族に可愛がられたネコの絵馬もある。東京都の絵馬は、中央区日本橋にある三光稲荷神社にかつて奉納されていたものと考えられる。この神社は、行方不明になった飼いネコが帰ってくる霊験があるとされ、無事に愛猫が戻った際には、ネコを描いた絵馬を奉納したという。都会のなかの小さな社殿で、今となっては絵馬を奉納するスペースもないのだが、現在でも失せネコ帰宅の祈願を受け付けており、願いが成就した人によってお礼の招き猫が奉納されている。

働いたり、捧げられたり、家族の一員であったり、ネコの人生もいろいろある。

東京の絵馬。たまというネコの名前がしるされる
（H0157212）